札幌学院大学図書館報

書林

第 70 号

2006 年 11 月 17 日　発行

図書館カウンターが新しくなりました---------1p
自著紹介----------2p～4p
世界の図書館----------5p～8p
Welcome to S.G.U. Library----------9p
私の薦める 1 冊----------10p～15p

図書館カウンターが新しくなりました

2006年9月に全学的に進められている施設のバリアフリー化の一環として図書館のカウンターが新しくなりました。図書館でも車椅子を必要とする学生の利用が増加しています。従来のカウンターは 1978 年の開館時に設置された高さ 100㎝ の 2 段式を使っていました。これは当時、流行った形ですがカウンターが高いため車椅子を利用する学生にとって非常に利用しずらいものでした。また貸出、返却、参考調査等をパソコンで処理している現状に対応した設計にはなっていませんでした。こうした実態をふまえてカウンターの高さを 77㎝ に下げることで車椅子の学生も利用しやすく、図書館職員も動きやすいデザインになっています。

バリアフリーという言葉は、1974 年 6 月の国連障害者生活環境専門家会議の報告書「バリアフリーデザイン」により広く知られるようになりました。その「バリアフリーデザイン」の緒言では障壁を「物理的障壁」と「社会的障壁」とに分類しており、社会的な意識の変革が必要だとしています。バリアフリーの実現は、障害者が持つ障害の様態は一人一様であるため障害全てに対応するというよりは、より多くの人が使いやすい状態にあるといえます。

一人でも多くの利用者が図書館に来て、利用していただき、使いやすいと思ってくれることを願っております。

車椅子を利用者する学生の皆さんにも
スムーズに対応ができます。

利用者は、パソコンのモニターを見ながら、
職員に質問をしたり、一緒に疑問を解決する
ことができます。

自著紹介

『経済統計』（コア・テキスト　第６巻）

新世社　2006 年１月

谷 沢 弘 毅 著

「消費者物価指数は、物価低下を正確に反映していないのではないか」、「我が国の失業率は実態より低く現れるのではないか」―これらはしばしば、人々が経済関連の議論をおこなっている場合に話題に上るテーマである。しかも物価指数論争、失業率論争といった名称が付されて研究者の間でも議論されるなど、複雑な経済社会を形成している現代ほど統計データの信頼性が議論される時代はないかもしれない。

しかしこれらの議論が人々の関心を集める理由は、たんに経済データが日常的に使用されているといった単純な理由からではない。むしろ複雑化する一方の経済社会システムをデータによって明確に把握したいという切実な願いがあるからにほかならない。その割には、その実態を正確に把握している人が少ないのも事実である。この理由として様々な要因が考えられるが、データ全般にわたるバランスの良い知識を持つことが難しいほどデータ構造が複雑化したことが考えられる。ここでの「バランスの良い知識」とは、データの作成方法のみならず、その作成にあたって対象となる経済現象をいかに把握しようとしているのか、データの速報性と正確性がどの程度確保されているのか、などのデータに関わる多種多様な知識のことである。

これらの知識を効率よく入手するには、いわゆる『経済統計』『経済データ』といったタイトルの本を購入すればよいはずだが、残念ながら現在までのところこの分野の本でバランスの良い解説をおこなっている本は少ないように思われる。本書では、これらの要求にできるだけ答えるように、基本的な統計に絞りつつその仕組みや分析方法のみならず、その統計の限界（あるいは長所や短所）までも説明するように心がけた。もちろん完全にデータを使いこなすには、相応の実務経験を要するが、それにしてもこのような経験を積む以前に、必要な知識を適切に吸収しておくことは重要である。本書は、このような知識を効率良く吸収してもらうために書かれたといっても過言ではない。

ところですでに読者もお気づきだろうが、経済統計といった名前の書物は、おもに２種類あるように思われる。一つは①経済関連の統計調査によって得られたデータあるいは統計表記を解説した本、もう一つは②それらデータの分析方法を中心に解説した本である。このような混乱は、もちろん経済学関連の教員がますます複雑化する現代経済を解明するために、経済統計を重要視していることから発しているにちがいない。しかしこのような純粋な思いは別として、とにかく科目内容の混乱を招かないためにも、同科目の内容を明確に把握しておかなければならない。

この問題に対しては、とりあえず（財）大学基準協会が発表した「経済学教育に関する基準およびその実施方法」（昭和 57 年６月 15 日改訂）という文書が、われわれに示唆を与えてくれる。その「別表、経済学教育に関する専門教育科目」では、数量経済に区分される専門科目として、「数

理統計」「経済統計」「計量経済学」「電算機と情報処理」が並列的に表示されている。この表示方法から考えると、経済統計とは前者（①）の意味で使用すべきことは明らかである。そして後者（②）はむしろ数理統計または経済統計分析というべきであり、前者（①）の内容を十分に解説することと後者（②）の説明は並行しておこなうべきであることも理解できよう。

以上のような考えにもとづき、私はすでに経済統計関連の本を２冊書いてきた（注）。今回は３冊目となるが、その間にＳＮＡ統計、国際収支統計、資金循環勘定、家計調査、事業所・企業統計調査（元事業所統計）、企業物価指数（元卸売物価指数）など、主要統計が軒並み大幅に改正されたため、本書は前著の改訂版と位置付けている。とはいえ前著でも、書かれた当時の統計を利用する際には十分に利役立つから、本書と比較しつつ読んでもらえれば、日本の統計制度の変遷に関する理解が深まるはずである。さらに前著が、どちらかというと構造統計の精度面を重視しつつ書いているのに対して、本書は景気変動といった動態統計の利便性を重視して書かれている点も付言しておこう。

今般、新世社よりコア・テキストシリーズ（本巻 17 冊＋別巻３冊）の１冊として、本書の執筆を依頼されたことは、私個人としてもたんに過去の著作が評価されたというのみならず、このようなデータ解説の必要性を出版者サイドが認識したという点において、きわめて感慨深い。本書は、基本的には大学学部レベルでの概説書、または一般教養書に分類される出版物であるため、たとえば机の上あるいは居間の整理棚等に置いておき、疑問点が現れたときに当該項目を拾い読みすることが効果的な利用法であろう。

（注）前著とは、以下の２冊である。『現代日本の経済データ』日本評論社、1997 年。『経済統論争の潮流』多賀出版、1999 年。いずれも本図書館の教員著作コーナー又は開架書棚に配置されているため、興味のある読者は閲覧されることをお勧めしたい。

谷　沢　弘　毅（経済学部：地域経済論）

〜〜〜

自著紹介

『北方世界の交流と変容　中世の北東アジアと日本列島』

山川出版社　2006年8月1日

天野哲也・臼杵　勲・菊池俊彦 編

本書は，私が参加している文部科学省科学研究費特定領域研究「中世考古学の総合的研究－学融合を目指した新領域創成」の主催で、北東アジアの研究班が中心となって 2005 年８月４・５日に本学で開催した公開シンポジウム「中世総合資料学と歴史教育－北方社会の交流と変容」の成果をまとめたものである。この研究プロジェクトでは，日本中世史観の再構築を目的に、考古学・文献史学・建築史学・材質科学・地球物理学・年代測定学・人類学などからなる 20 以上の研究班が，日本列島，北東アジア，東南アジアなどの各地の資料を共同して研究している。この中で私は，北東アジアの中世遺跡の研究を進めている。北海道を含めた北方社会研究は、ヒト・モノ・情報が境界を越え行き来した日本史・東洋史の枠を越える領域であり、この研究の展開には格好の舞台である。本書の前半では，北海道・サハリン・ロシア極東，中国，モンゴルを舞台として，サンタン交易，靺鞨・渤海・女真社会，アイヌ文化，中国王朝と北方との関わり，モンゴル帝国の実態などに関して，我々の研究成果と関連研究者による最新研究を紹介し，北方研究の概略をつかめるものとすることを試みた。

またもう一つの核として、歴史教育を取り上げた。最近の高校における履修不足問題に示されているように, 受験に不要というような理由で, 歴史教育が軽視されている現状がある。その結果か，正直なところ大学では歴史意識・歴史観に無関心で各時代や事象・人物などの基礎知識がおぼつかない学生が増加している印象を受ける。一方で，日本の周辺では歴史感のあり方が外交摩擦を生じさせ，あるいは日本の歴史・伝統・文化の重視などを主張する為政者も表れているという，不思議なズレが生じている。また，国際化がさけばれ外国語教育が注目されるものの，必修としたはずの世界史には関心が低いようである。実際には，日本列島が他地域とまったく孤立していた時代はなく，常に世界の動静が日本列島に直接影響を与えていたにも関わらずである。歴史を学ぶこと，日本列島以外の地域の歴史を学ぶことの意義・重要性，そして面白さを学生・生徒たちに伝えていくことが，研究・教育者の重要課題である。我々の研究で目指しているのは，日本史・世界史というような区分の見直しであり，また歴史教育の在り方の見直しである。本書の後半では研究成果を活用して，歴史観の見直しや歴史教育への見直しまで進むことが可能か，高等教育の専門家たちが検討を行った。

本書の内容は，まだ研究の途中経過であり，課題への明快な解答は得られず，本来の意図が十分に達成されたとはいえないが，歴史研究・教育の新たな試みの一つとして，本書の内容を受け取っていただければ幸いである。

臼杵　勲（人文学部：考古学）

＜世界の図書館＞

北京大学図書館における自動改札について

社会情報学部　山 崎 哲 永

2005年の留学研究時に北京大学がくれたものの中で一番嬉しかったのは「学者証」だった。

これは身分証明書である。大仰な名前の証書だ。生まれて初めて学者だと認められたような気がして相当はしゃいだ。しかも、街には「学生、軍人、人民の教師は2割引」という食堂まであったのだ。学者証を見せると食事が安くなる。最初は「人民の教師じゃないけれど、いいのかな」と思って遠慮しながら見せてみると、食堂のみなさんは人民の教師の一端と判断してくれたのか、会計時に2割安くなった。しばらく通ってなじみになったら、注文時に「はい、学者証出して」と向こうから言うようになった。まあ、それはいい。

さて、二番目に嬉しかったのは図書館の利用証だった。これにはレストランの割引よりもっと実際的な益がある。というより、大きな危険を回避できるのだ。これがないとどんなことになり得るかご紹介しよう。

さかのぼること2003年の冬、生まれて初めて北京大学図書館に資料探しに行った。出発前にサイトを調べて手続き情報を読み解き、中国人の同僚に文書の書式を教わり、学長名の利用願いを作成してもらって勇躍「上京」。当時は北京大学と清華大学の学食で爆破事件があった直後だったため学外者の入構管理は厳しく、紹介者がいないと構内に入れない。そこで、知り合いの、そのまた知り合いの院生を紹介してもらって、無事に構内に入ることができた。めでたし。

図書館新館正面。屋根が特徴的だ。

図書館へは、学長名入りの紹介状を持参し、知り合ったばかりの院生に入り口の警備員に対して身分を証明してもらって図書館に入った。

北京大学新館はまるでお城のような威容を誇っており、外から見上げるだけでかなり圧倒される。その上、カーキ色の制服を着た警備員さんにもなんとなく圧倒される。見上げると、建て増しなど考えてもいないような、故宮を思わせる屋根が力強く空に向かってそびえている。もしこれが北海道にあっても図書館だとはまず見抜けまい。玄関入り口でふと脇を見ると立て看板があり、「近年、見学者が増えて利用者に不便を強いている。ついては団体での見学はご遠慮いただくことにした」と読める。そう言えば、図書館をバックに写真を撮る現地の観光客らしき人もちらほら見える。日本の北大（ホクダイ）同様、北大（ペイダー）は観光名所でもあるようだ。

さて、同行の院生に怪しい者ではないことを証明してもらってようやく図書館ロビーに入ると、向かって右手に新館の由来を刻んだ大きなレリーフがある。なんでも、総面積は２万６千平方メートル余り、李嘉城という博士とその下の香港長江企業集団（グループ）による１千万ドルという気前の良い寄付によって建学百年の記念に建てられたそうだ。左手には手続きカウンターが。座って

いるのは60歳に手が届くと思われるおじさんであった。ここで入館手続きをする。

日本で書類を準備していた時、同僚から「文書は日本語でいいですよ。漢字があるから、向こうもちゃんとわかります」と言われていたので中身は日本語である。「この者は本学の正式の教員だから図書館を使わせてやってくれ、ひとつよろしく」といった主旨が丁寧な日本語で書いてある。お手本がなかった上に、ちょっとしたことで入館拒否されては困ると思い、わずか数行の書類ながらも微に入り細にわたって文面の下書きをして札学院大の事務に提出、サインとハンコをもらって大事に抱えて持ってきたものである。

おじさんは証書をうけとると、文書のタイトルにある漢字と、最後の書名の漢字だけ指で確認して読んだ。

真ん中は飛ばした。そして言う。

「はいはい、わかったよ」

準備に苦心したので本文も読んで欲しかったが、まあこんなものだろう。入れてもらえれば文書の目的は達成されるのだ。ちなみに、その翌日は別なおばさんで、書類を見せると「え～？」と拒絶の意を示されたので、「昨日は大丈夫だった」というとすぐに入れてくれた。前例は作るものだと知った。

さて、日本から見てきた図書館サイトには、一日の利用料が2元とあった。今ここで払うのかな、と思っていると、おじさんが続けて言う。

「はい、パスポート貸して」

……え？

外国人の命綱、大事な大事なパスポートを、図書館一時利用の質物に取られるのか？

私の顔には不安の表情がありありと浮かんでいたに違いない。おじさんは私を安心させようとして、手元の引き出しを開け、30冊はあるかと思うパスポートが行儀良く並んでいるのを示した。その背をぱらぱらと繰りながらおじさんは言った。

「ほら、みんな置いて行っているよ、大丈夫、大丈夫」

多分、おじさんはそう言った。当時はまだあまり中国語がわからなかったのだが、おそらくそう言った。南カリフォルニア大学の某先生の研究では、情報の伝達は言語2割、その他8割だとのこと

である。1割対9割という説もあるらしい。この場面ではその他8割あるいは9割が助けになったようだ。一緒に来てくれた院生が、呆然とする私に英語で「パスポート出して」と促す。聞いてないぞ。図書館のサイトにも書いていなかったぞ。

全身で不安を訴えつつ、しぶしぶ、パスポートを渡す。代わりにおじさんは、北大図書館の赤いハンコの押してある、画用紙で作った横長の映画の券のような利用証をくれた。帰りにここで利用証を渡し、2元を払って半券とパスポートを返してもらうという仕組みのようだ。

次に、カウンターから更に左手奥に行った警備室で、ロッカーに鞄を預ける。万引き防止である。院生が英語で言う。

「貴重品は持ってくださいね」

警備員のいる部屋なのに、なぜ用心がいるのだろうと思いつつ、外国人として二番目に大事なお財布と、研究者として一番大事な文献リストだけ持ってロッカーの扉を閉じようとするが、ゆがんでいるのか閉まらない。さらに鍵もない。南京錠を自分で持参してかける仕組みなのだ。ちなみに2005年現在はこの部屋はすでになく、階段脇にあるロッカーに荷物を入れて、自前の鍵をかけるようになっている。数が足りないので争奪戦である。

さて、私の目当ての文献があるのは4階である。エレベーターを見ると、ドアの張り紙が目に入った。

「エレベーターの絶対数が足りません。若者は階段で登りましょう」

私は自分が若者か否か2秒くらい考えた。私事、もともと脚腰が弱いので、普段から疲れたら無理せずエレベーターを使っている。しかし案内役の院生が若かったのが間違いだった。2秒の間にすでに階段で5、6段先を行っている。方や私は「エレベーターで行こう」という中国語がわからない。諦めて階段を登る。4階にたどり着く頃には、自分がすでに若者ではないことを全身で自覚した。次からは堂々、エレベーターだ。

ところで、北京大学図書館はなかなかサービスが良い。本の必要部分はコピー専門の職員さんが有料だが安価にコピーを取ってくれるし、コンピューター端末での蔵書検索が可能なのはもちろんのこと、2005年7月に改修を終えて公開された新装旧館（変な表現だが）ロビーにあるおびただしい数の端末では電子ファイルになった論文をダウンロードできる。フロッピーかUSBメモリーを持参すればいい。相互貸借も充実しており、カウンターにはさまざまな区分を書いた料金表が置いてある。なぜか、「日本北海道大学定期刊行物」の論文が1本20元とある。異国で北海道の文字を見ると嬉しいものである。

リストを見ると、他の図書館からコピーを取り寄せる場合の1ページ平均料金は2元程度と分かる。しかし、学位論文だけは例外で、修士論文・博士論文ともに1本570元、北大構内の自転車店で働く若者の1か月分の給料を上回る。使い手としては5万円くらいの感覚である。盗作防止のためだろうか。

話しを戻そう。

北京大学図書館新館4階の人文・社会系フロアーの本棚には、私が欲しくて欲しくてたまらなかった論文の載った雑誌が山とあった。日本語学の論文だったため、漢字ばかりの中国語本文に日本語の例文がまざっているのを見ると、なんとなく読めるような気がしてしまっていたが、まともに読めるようになったのはようやく2005年の夏頃である。一緒に来てくれた院生が「これを読めるのか？」と不思議そうに見ている。読めるような気がしていたので、読めるように見えたと思う。自信は大切だ。

さて、欲しい論文はコピーした。帰ろう。1階ロビーのカウンターへ行って利用証と2元を渡すと、おじさんが半券と一緒に渡してくれようとしたパスポートは緑色をしていた。

「違います、赤いのです！　日本のです！」

ちゃんと中国語が出てきた。火事場の馬鹿力だ。

「ああ、日本ね、赤ね、はいはい」

図書館の利用証がないと、こんな危険にさらされてしまうのだ。自分の大事なパスポートも、こんなふうにして他人に渡されそうになっていたのだろうかと思うと今でも冷や汗が出る。

そして、2005年の4月、念願叶って留学してみると、図書館は「自動改札」になっていた。顔写真のあるバーコード付き利用証を改札機にかざすと、自分のID番号とフルネームが表示され、ＪＲの改札よろしく扉が開く。ただ、自動改札になっても警備員のお兄さんが脇に立っている。ものものしい雰囲気は変わりない。しかし、もうパスポートが迷子になる危険からは解放されたのだ。

めでたし、めでたし。

しかしすでに留研から戻って数ヶ月、利用証の期限も3月の末で切れている。次に行くときはやはり、またどきどきしながらパスポートを渡して、手元に戻るまで不安とともに過ごすのだろう。北京大学図書館の自動改札が恋しい。

Welcome to S.G.U. Library

今回は、今年度新設のこども発達学科１年齊藤友通君にご登場いただきました。

約束の時間に颯爽と現れた齊藤君は、予定の時間を超過したにもかかわらず、大変面白くお話が出来てよかったとおっしゃり、かえって恐縮しました。

○本学のこども発達学科を志望した動機は、当然、小学校の教員を目指すという目的があったからとはっきり言い切り、意思の強さを伺わせます。

○出身は函館市で、学生生活は楽しく、入学後、自動車の免許を取得されたそうで、趣味は、ギターをはじめ音楽関係で、今年の大学祭には、ライブに参加したといいます。

○講義中の学生の態度は、全体的に力がはいっていると思いますときっぱりといいます。

○図書館には、大体１週間のうち半分は来て、DVD を観たり、ゼミで発表するための調べ物やレポートを作成するために利用していますとのこと。従って、ジャンルでいえばやはり教育関係が多いといいます。図書館の雰囲気も大好きですということでした。

○入学時の新入生図書館ガイダンスでは、一言でいえば、図書館の施設や利用等について知ることが出来て良かったとにっこりとお話されます。また、情報リテラシーガイダンスでは、レベル的にはちょうど良かったとのことで、お陰で図書については、大体探せるようになりましたと嬉しそうにいいます。

○講義のかたわら資格試験に挑戦したいといいます。具体的には、現在、英語検定２級を取得しているので、更に上級を目指すつもりですが、その他にもいろいろと考えているとのことです。

○「札幌学院大学バリアフリー委員会」に属して手話を勉強したり、聴覚に障がいをもっている学生に対して、講義中教員が話した内容を要約して書き込むことで講義の内容を伝えるノートテイカーをしたりしていますが、大変やりがいがあって楽しいとのことでした。札幌学院大学バリアフリー委員会は学生生活のコアになっているということでした。

○今年、栃木県で「第 26 回ろう学生の集い」に参加して、今後バリアフリー委員会に生かせる経験が出来たことを嬉しく思いますとのことでした。

○図書館の雰囲気が変わったと感じたのは、カウンターが新しくなったんですね。との問いかけに、バリアフリーの関係で車椅子利用者について考慮したことを説明すると納得の笑顔をされました。

○最後に、グループ学習室について多少の話をしてもよい部屋ということになっていますが、あまり騒々しい時には、職員から注意をしてほしいとの要望がだされました。

全体的に相手を思いやるやさしい気持ちが溢れていて、充実した学生生活を送っている印象をうけました。今後目的に向かって進んでいただきたいと心からエールを送りました。

＜私の薦める１冊＞

『 破　獄 』

吉　村　昭　著
岩波書店　1983 年 11 月

社会情報学部 社会情報学科２年　安　川　航　平

私は日常的に S.G.U. Library に通い、読書やインターネットなどのメディア使用をしています。本棚をみていて最近よく自分が興味を持っていたのが、少年非行の話や外国の殺人犯の話などであり、ちょっとダークサイドな本を読んでいました。その中でもちょっと昔の話ですが僕がすごいなと思った一人の脱獄囚、脱獄不可能といわれる４つの刑務所からの脱獄を成功させた日本の脱獄王、白鳥由栄について書かれた本を紹介したいと思います。

昭和二十年前後を時代背景として、刑務所での獄房に閉じ込められた彼と、彼を閉じ込めた男たちとの闘いの話であり、時代と状況の描写も詳しく描かれており、非常に面白いです。支配と服従の関係の怖さと、圧倒的な数である看守の厳しい監視体制、「お前のような人殺しはどうせ死刑だ、早く死んでしまえ」と顔に唾を吐かれるなどの辛辣な処遇に耐えながら、看守達との心理戦を勝ち取り、反抗しながら何度も何度も獄を突破しすり抜けていく彼の人知を超えた力と類稀なる知恵、平成の世では感じられない超人的な人間としての底力に感心します。

白鳥由栄は、明治 40 年 7 月 31 日、青森県で生まれた。 豆腐屋を営み、裏で泥棒をして生活していた。 昭和 8 年 4 月 9 日、盗みに入った家で発見され、殺人を犯してしまう。 2 年後、その時の共犯者が別件の「土蔵破り」で捕まったのを新聞で知る。義理堅い白鳥は自首した。昭和 10 年 12 月 10 日、青森刑務所に移送される。これが受刑生活のはじまりだった。 青森、秋田、網走、札幌と次々と脱獄と移監を繰り返していくなか、彼と対応し、やりとりする看守たちや警察の人間との息もつかせぬ人間模様を描いた作品です。

当時、第二次世界大戦の最中、全国の刑務所では監獄以外にも生活があった看守にも相当のストレスがあったようです。国からの命令で網走刑務所には期限内に道を作ることを強制させられていたようであり、それは看守たちにとっても重労働であり、大きなプレッシャーとなっていた。その忙しいさなか、白鳥が脱獄をし、全国でも脱獄が増加。脱獄者を減らすため、国は当時貴重な食べ物であった白米を受刑者に与えるように徹底していた。しかし看守は芋や麦飯である。自分や家族が飢えているのに重犯罪者が美味そうに白米を食っている。そして網走刑務所にいる凶暴な殺人などの重犯罪者である彼らに囲まれ油断などしたら殺される危険は十分あるのだから余計に辛くあたり管理徹底するのは当たり前といえば当たり前なのかもしれない。

実話が基であり、最近の SF やありきたりの図書ではちょっとみられない面白さのある本だと僕は思います。

＜私の薦める１冊＞

『ありがとう大五郎』

大　谷　英　之 写真・大　谷　淳　子 文
新潮社　1997 年 2 月

人文学部 人間科学科 3 年　滝 口 由 美

自分の手で物をつかんで食べる。自分の足で歩いたり、走ったりする。そして、誰かの愛情を受け、誰かの手で守られ育てられる…。あなたにとってこれらは当たり前のことですか？この様な問いに当たり前だと答える人にも、そうでない人にもこの『ありがとう大五郎』という本をお薦めしたいと思う。

1977 年、奇形猿を撮影していたある写真家が、手足のない小猿を自宅に連れ帰ってきた。その小猿は大五郎と名づけられ、2 年 4 ヶ月という短い生涯を終えるまでの間を、一家と共に過ごすこととなった。大五郎と日々を送る家族たちは、世間から冷たい言葉を投げられたり、「野生の猿」を育てるが故の苦労の数々を味わうこととなる。しかし、大五郎の障害を乗り越え生きることに挑戦し続ける姿を目の当たりにすることで「生きているその時を大切にしていく」ということや、ありのままの姿を受け入れ、共に生きる心を持つことの素晴らしさなどを実感していくこととなる。

この本は、写真家である大谷英之さんが大五郎と家族の姿を記録した写真の数々と、家族たち（とりわけ、大五郎の母親代わりとなった奥さんの淳子さん）の手記によって構成されている。家族たちのリアルな思いがストレートに綴られており、自己の体験と身近に感じられ読みやすい作品であると思う。

今まで私は、自分が不自由することなく生活していることを当たり前のように思っていた。また、何か自分ひとりの力で乗り切るのが困難な出来事に出くわすと、大変な労力を費やし多いに悩んできていた。多くの人が、私のような思いや経験をしてきたであろう。そして時には、どれだけ努力をしても結果が伴ってこなかったり、物事が思うように進まなかったりして努力すべき目標すらも見失ってしまうことがあるだろう。人はそんな時、ひどい自己嫌悪に陥ってしまう可能性がある。そして、その自己嫌悪が悪化し自分が生きていることにさえ疑問を抱いてしまうことがあるだろう。

そのような状態から前向きになる一つの方法として、「生きている」というその事実がどれほど偉大で尊いことであるのかを改めて実感することが挙げられるだろう。この本は、その実感のきっかけを与えてくれると思う。大五郎自身が、自分に障害があるということを意識していたかどうかは定かではないが、大五郎は精一杯に自身の力で生きることに挑戦し続けた。その姿は、私たちが忘れかけていた「生きているという現実さえあれば、
できないことは何もない」ということを切実に訴え
かけてくる。

色々と精神論的なことまで書いてしまったが、
この本自体は大変読みやすい作品であるし、静かな
深い語りかけの中から感じ取る要素が沢山あると思う。
是非、一度読んでみてはいかがだろうか。

＜私の薦める１冊＞

『ニングル』

倉 本　聡 著
理論社　1985 年 12 月

情報処理課　　大 坂　卓

現在、地球を取り巻く自然環境は悪化の道を辿っており、日々様々なメディアを通じて環境問題に関するニュースが報じられています。私たちはこれらの環境に関するニュースを目にしない日はほとんど無く、誰しもが地球環境の将来について危惧の念を抱いていると思います。「僕はボランティアでゴミ拾いをしました」「私は森を増やすために植樹活動に参加しました」といったような環境保全に対する活動をしている人たちは沢山いますし、環境問題に対して具体的な活動は何もした事はないが地球環境に対する危機意識は持っているという人たちも沢山いるでしょう。これら全ての人たちに私は『ニングル』という一冊の本をお薦めします。

私の薦める『ニングル』という本は、読んでいるととても不思議な感覚を抱く本で、本の中の出来事がフィクションなのか、それともノンフィクションなのかという事をふと考えてしまうのですが、私は、この本の出来事は紛れもなくノンフィクションだと思います。

ニングルとは以前、北海道富良野市の或る森の中で生活をしていた体長１５ｃｍくらいの先住民族のことで、それは架空の生き物ではなく実在していたようです。

当時の北海道では、技術発展に伴う土地開発が各地で進んでおり、広大な自然を有する富良野の森にも森林開発の波は打ち寄せ、ニングルの生活する森にもその開発の手は伸びようとしていました。更には、マスメディアによるニングルについての報道がなされるようになり、テレビ局による現地取材が行なわれるような事態にまで陥りました。

本来、ニングルは自然と共生している生き物であり、人間と接することはほとんどありません。そのためニングルと接することの出来る人間はごく一部に限られていました。富良野の森に迫っていった森林開発の波やマスメディアによる報道活動によって、自分達の生活の場を脅かされていったニングルたちは彼らの生活圏を失っていき、やがて私たち人間の前に二度と姿を現さなくなりました。

私たち人間は、便利さや幸福を追求するあまり、自然環境に対して暴挙を繰り返してきたと言えるのではないでしょうか。その結果、地球の自然は、温暖化やオゾンホールの出現や酸性雨など多くの問題を抱える状況に陥ってしまいました。ニングルが私たちの前から姿を消してしまったのは、ニングルが私たち人間に対して暗に投げかけた自然環境を危ぶむメッセージなのではないでしょうか。

現代社会に生きる私たちは、自然環境についての本当の価値観というものを見失いかけていると思います。そういった中でこの『ニングル』という本は、自然環境に対する価値観を私たちに再認識させてくれます。自然破壊の問題や環境問題について研究をしている方々、もしくはそれらについて興味があるという方々はもちろんですが、環境問題に今まで興味がなかったという方々にも是非一度、この本を読んでいただきたいと思います。

＜私の薦める１冊＞

『ハイペリオン』（早川文庫ＳＦシリーズ）

ダン・シモンズ 著・酒 井 昭 伸 訳

早川書房　2000 年 11 月

図書館　京 谷 正 博

2006 年８月 30 日の朝日新聞朝刊に「観流 06－いまどきの人気のツボ抑えまくり－涼宮ハルヒの勢いが止まらない」という記事が掲載された。角川スニーカー文庫、いわゆるライト・ノベルズ、谷川流著の『涼宮ハルヒの憂鬱』（注１）が 2003 年６月刊行のシリーズ第１作目から 2006 年３月刊行の第７作目までの発売累計が１３０万部、そして 2006 年４月からのアニメ放送の影響で８月までに２８０万部に達したという内容だった。また、この記事の２日前の日経産業新聞には、アマゾン・ジャパンのＤＶＤベストセラーランキング上位を『涼宮ハルヒの憂鬱』関連が占め、販売数が８月時点で各巻８万本を越えたことが報じられた。私が「涼宮ハルヒ」を知ったのは、2006 年６月にライト・ノベルズを話題にしたラジオ番組で、角川スニーカー文庫編集長、野崎岳彦氏が『涼宮ハルヒの憂鬱』は１８０万部を超える大ヒット作だと語ったのを聞いた時が最初であったと思う。そんなに売れているならと思い、書店に赴き萌え系美少女達の表紙が並ぶライト・ノベルズのコーナーに、場違いとは思いながらも足を踏み入れ、シリーズ第１作目の『涼宮ハルヒの憂鬱』を購入し早速読んだ。内容は、無自覚のうちに、自分が望むとおりに世界を改変してしまう力を備えた女子高生「涼宮ハルヒ」が周囲を巻き込みながらドタバタ劇を繰り広げるＳＦ、ミステリー、学園コメディがないまぜになった物語。ハルヒは高校生活第１日目の自己紹介で「ただの人間には興味ありません。この中に宇宙人、未来人、異世界人、超能力者がいたら、あたしのところに来なさい。以上」と宣言する。そして学校内の全ての部活動に仮入部し、自分が求める部活動が無いとわかると、クラスメイトのキョンを巻き込み、自らの同好会を立ち上げる。これがＳＯＳ団＝「世界を大いに盛り上げるための涼宮ハルヒの団」である。まず、部室を確保ということで、部員が１人しかいない文芸部の部室を占拠し、その文芸部員である長門有希をＳＯＳ団の団員にしてしまう。更に、上級生の朝比奈みくる、転校生の小泉一樹をＳＯＳ団に連れてくる。ハルヒは気づいていないが、この３人こそ、宇宙人であり、未来人であり、超能力者であった。しかしキョンだけは普通の高校生。この宇宙人、未来人、超能力者は、それぞれのバックグラウンドからハルヒを監視する役割を与えられ、キョンと共にハルヒによる世界の改変、崩壊を食い止めるべく涙ぐましい努力をするというストーリである。ＳＦ作家の山本弘氏は、この作品を「現実は見た目どおりではない」という発想から書かれたパラノイアＳＦの手法、たとえばロバート・Ａ・ハインラインの『彼ら（かれら）』（注２）や手塚治虫の『赤の他人』（注３）などがその典型例であり『涼宮ハルヒの憂鬱』は、この手法を採りながらも、主人公ハルヒからの目線ではなく、この４人の脇役の目線から描いているといるところに面白味があると評している。（注４）

私の推薦図書が何故、ダン・シモンズ著の『ハイペリオン』なのか、それは、涼宮ハルヒが占拠した文芸部の部室にいた最後の文芸部員であり、図書館が大好きな宇宙人（正確には、「この銀河を統括する情報統合思念体によって造られた対有機生命体コンタクト用ヒューマノイド・インターフェイス」）の長門有希が読んでいた本が『ハイペリオン』の続編である『ハイペリオンの没落』だったからだ。

小説では、部室でいつでも本を読んでいる有希と二人きりになったキョンが《「何を読んでんだ？」、二人して黙りこくっているのに耐えかねて俺はそう聞いてみた。長門有希は、返事の代わりにハードカバ

ーをひょいと持ち上げて背表紙を俺に見せる。睡眠薬みたいな名前のカタカナがゴシック体で踊っていた。ＳＦか何かの小説らしい。》との表現で『ハイペリオンの没落』であるとは書いていない。しかし 2006 年４月からテレビ放送された京都アニメーション制作によるアニメは、なかなか凝った作りで、その本が『ハイペリオンの没落』と確認することができる。そして、長門有希が自分の正体とハルヒの能力をキョンに明かすべく、待ち合わせの場所を書いた栞を挟んで「この本読んで」と渡した本が『ハイペリオン』だったのである。

このダン・シモンズ著の『ハイペリオン』は、1990 年のヒューゴ賞長編部門の受賞作であり、後のＳＦ小説やＳＦアニメに多大な影響を与えた傑作である。そしてオールタイム・ベストＳＦランキングではハインラインの『夏への扉』と並んで常に上位に位置している。私は、この作品が、早川書房の『ＳＦマガジン』第 13 巻 13 号、創刊 400 号記念特大号（1990 年 10 月号）にＳＦ評論家の山岸真氏による「海外ＳＦ取扱説明書」で紹介されていたことを思い出した。山岸氏は「本を手にしたとたん、これは傑作だ！と直感する－あるでしょう、そんな経験が。この本の場合が、まさにそれだった。早い話が、表紙画に魅せられたのだ。」（注４）と紹介し、表紙画だけでなく内容も賞賛している。山岸氏が魅せられた表紙画は、原書の表紙画で「大叢海」という草の海原を疾駆する「風らい船」という帆船をバックに異形の魔物「苦痛の神」シュライクが立っているというデザインである。日本語版は、1994 年 12 月に酒井昭伸氏の翻訳で早川書房から刊行されており、この表紙画は生頼範義氏によるイラストで原書とは異なっている。また、2000 年に刊行された文庫も生頼氏によるイラストであるが、単行本とは異なっており、それぞれ「ハイペリオン」を象徴する素晴らしいデザインである。

さて、この『ハイペリオン』の内容だが、時は 28 世紀、既に地球は小ブラックホールに飲み込まれ消滅している。人類は銀河中の惑星に散らばり、物質を転送できる転移ゲートによるネットワーク技術でＷＥＢ状に結びつき、人類連合を組織し一大銀河帝国を構築している。ハイペリオンはＷＥＢの辺境に位置する惑星の一つである。その首都はキーツ。この辺境惑星には反エントロピー場に包まれ時間が逆行している「時間の墓標」という遺跡があり、その「時間の墓標」が開きつつある。そこには、シュライクという異形の魔物、苦痛の神、殺戮の怪物が現れる。「時間の墓標」の謎を解くために、イエズス会神父のルナール・ホイト、ＦＯＲＣＥ軍兵士のフィードマン・カッサード、詩人のマーティン・サイリーナス、女探偵のＭ・ブローン・レイミア、歴史学・倫理学者のソル・ワイントラウブ、ハイペリオンの元領事のマーリン・アスビック、森霊修道士のヘット・マスティーンの７人がシュライク巡礼に選ばれ、艱難辛苦の末に「時間の墓標」に辿り着く。『ハイペリオン』はこの旅の途中でそれぞれが「時間の墓標」に行かなくてはならない理由、そしてシュライクと対峙しなければならない理由を各自が語るという形式で物語が進む。それはＳＦであり、ミステリーであり、ホラーであり、ハードボイルドあ

る。６つの短編を読んでいるようでもある。７人のうち森霊修道士のヘット・マスティーンは、大叢海を帆走する風らい船から突如姿を消してしまうため、彼の物語は無い。時を同じくして、遠い昔に、人類から袂を分かち、スペースコロニーを改造した大船団を組んで宇宙の果てに進出した人々の子孫がアウスターと呼ばれ、彼らが「時間の墓標」の変化と共に人類連合のＷＥＢに迫り、戦争が始まる。ハイペリオンの「時間の墓標が」アウスターとの戦いに勝利するための変数とされ、巡礼たちの運命が人類の運命を左右することになる。

ダン・シモンズの『ハイペリオン』は、４作品のシリーズで完結する。第１作目は謎の出題編であり、第２作目の『ハイペリオンの没落』が回答編になる。更に細かい部分が第３作目の『エンディミオン』と第４作目の『エンディミオンの覚醒』で解決するという構成になっている。

『ＳＦマガジン』第 47 巻 9 号（2006 年９月）では「ダン・シモンズ特集」が組まれており、香月祥宏氏の「ダン・シモンズ特集　作家論「枠」を駆使する作家」でこの作品の構成、人気について詳しく紹介されている。（注６）

また、この作品は 17 世紀のイギリスロマン主義の詩人、ジョン・キーツの叙事詩「ハイペリオン」にインスパイアーされており、キーツの復元人格サイブリット（アンドロイド）のＭ・セヴァーンが、続編の『ハイペリオンの没落』で謎解きの中心キャラクターとして活躍する。ジョン・キーツの「ハイペリオン」は『対訳キーツ詩集』（岩波文庫　イギリス詩人選　10）（注７）に所収されている。このダン・シモンズの作品をより深く理解する上で、是非こちらも読んでもらいたい。

長門有希は、こんなディープなＳＦを読んでいたわけであるが、角川書店のライト・ノベルズ雑誌『ザ・スニーカー』2004 年 12 月号では、いつでも何かしらの本を読んでいる長門有希が、いったいどんな本を読んでいるのかが気になる人のために「長門有希の 100 冊」と題して、有希が気に入っている古今のＳＦ、ミステリーなど 100 冊を紹介するという企画が組まれ、ＷＥＢサイトやブログなどで話題となった。本学図書館にも有希のお薦め本が少なからず所蔵されている。

ＳＦ作品は、ダン・シモンズの著作はもちろんのこと、ロバート・Ａ・ハインライン、アイザック・アシモフ、フランク・ハーバート、フィリップ・Ｋ・ディック、アーサー・Ｃ・クラークの作品、そして K.H.シェール、H.G.エーヴェルス他のローダンシリーズ（全巻は揃っていないが）等のディープなものまでが本学図書館には所蔵されている。是非、図書館２層の文庫コーナーに行ってみてほしい。

注１）『涼宮ハルヒの憂鬱』（角川スニーカー文庫）谷川流著　2003.6　第 8 回角川スニーカー大賞受賞

注２）「彼ら（かれら）」ロバート・Ａ・ハインライン著『輪廻の蛇』（早川文庫ＳＦ 487）所収　p255-284
早川書房 1982.9

注３）「赤の他人」手塚治虫著『ＳＦファンシーフリー』（手塚治虫漫画全集 80）所収　p201-232　1979.1

注４）「『涼宮ハルヒ』はパラノイアＳＦの新機軸だ！」山本弘著『オトナアニメ』Vol.1　p26 洋泉社　2006.8

注５）「山岸真の海外ＳＦ取扱説明書」山岸真著『ＳＦマガジン』第 13 巻 13 号　p250-253　早川書房　1990.10

注６）「ダン・シモンズ特集　作家論「枠」を駆使する作家」香月祥宏著『ＳＦマガジン』第 47 巻 9 号 p38-41
早川書房　2006.9

注７）『対訳キーツ詩集』（岩波文庫　イギリス詩人選　10）ジョン・キーツ著　宮崎雄行編　岩波書店　2005.3

図書館報「書林」第 70 号編集後記

図書館報「書林」第 70 号をお届けします。

・近隣の山々は紅葉がすすみ、秋深しを感じさせます。
・秋には、食欲の秋、芸術の秋、スポーツの秋、そして読書の秋といろいろな秋があります。
・秋の夜長、図書館にある図書を何冊読むか？を自分に課して生活の一部として図書館を利用して図書資料を使いこなすことを切望します。
・また、図書館では、利用者が更に図書館を利用しやすいようにカウンターを一新しました。
　如何でしょうか？
・今号は、社会情報学部の山崎哲永先生が、留研で北京大学図書館を利用された時のエピソードを掲載することが出来ました。
・今号も多くの皆様方のご協力を得て発行することが出来ましたことを感謝申し上げます。

〜〜

札幌学院大学図書館報「書林」第 70 号について

＊掲載記事の著作権は札幌学院大学図書館にあります。

＊記事・写真の無断転載は禁止します。

＊紹介図書の写真については、各出版社から掲載許諾をいただいております。

許諾を下さいました各出版社の皆様には心からお礼申し上げます。

〜〜